

独立行政法人評価委員会
第 26 回沖縄科学技術研究基盤整備機構分科会
議 事 録

内閣府沖縄振興局
沖縄科学技術大学院大学企画推進室

独立行政法人評価委員会
第26回沖縄科学技術研究基盤整備機構分科会
議 事 次 第

日 時 平成24年7月4日（水）16：05～17：40

場 所 中央合同庁舎第4号館12階共用第1214会議室

1. 退職役員の業績勘案率について

○平澤分科会長 それでは、時間となりましたので、第26回の分科会を始めたいと思います。

今日は最後の分科会になろうかと思っているところです。本日は3名の出席で、長岡委員、御厨委員は都合により御欠席ということですが、定足数を超えておりますのでこの会は成立しております。

それでは議事に入る前に議題について事務局の方から説明願います。

○岩井事業振興室長 それでは議事次第と資料一覧をご覧ください。本日の議題は、機構の退職役員の業績勘案率でございます。

資料1から資料3までご用意しておりますが、こちらはこれまでの内閣府の独立行政法人評価委員会や総務省の政策評価・独立行政法人評価委員会における議論の経過をご説明するためにご用意したものです。詳細につきましては後程ご説明申し上げます。

参考資料の方ですが、これまで分科会でも配布されものです。これにつきまして退職された3名の業績勘案率の算定、業績勘案率に関する各種閣議決定等につきましてご用意いたしております。

なお、3月同様に資料の扱いにつきましては、対象となります役員の方の氏名につきましては個人情報保護のためマスキングする形で対応させていただきます。

議題の説明としては以上になります。足りないものがありましたらお申し付けください。

○平澤分科会長 ありがとうございます。それでは資料の中身について議論していくことになろうかと思えます。これまでの経過、提出した資料について事務局から説明をお願いします。

○岩井事業振興室長 それではご説明いたします。まずこれまでの経過のご報告としまして、資料1ですが、今年の3月29日に内閣府独立行政評価委員会で退職役員の業績勘案率を1.0とすることを決定いたしました。その後、総務省の政策評価・独立行政法人評価委員会に対しまして、内閣府の業績勘案率案を提出したところ、4月の総務省のWGにおきまして何点か意見が出されました。1つは役員の実績につきまして、一定の評価や理解が示されましたが、いわゆる不祥事の多さも指摘され、総合的に勘案すると1.0とは認められないというものでございます。またプラス要因につきまして、中期目標を大幅に上回る顕著な業績なのかが、ややわかりにくいというものです。この時の結論としましては保留になりました。これに対して、内閣府といたしましては、資料2にありますような内容を改めて総務省に対して説明しております。総務省から先月末の総務省のWGにおいて説明されたと聞いております。この資料2が説明した内容の概略です。資料2について説明致しますと、大きく2つに分かれておりますが、一つはOISTの顕著な業務実績についてです。一つの特徴としまして、前例のない困難な任務を短期間に完遂したことです。世界最高水準の教育研究機関を沖縄の地にゼロから設立する、ということは我が国でも前例のない困難な任務であった。こういった中で評価の約9割が、A+またはAの高い評価であり、特にA+の評価がついたものは、内閣府所管法人の中でもごく僅かであり、極めて顕

著な業務実績を高く評価されたことの表れであります。特にO I S Tにおいては教育研究機関としての中核的な業務である人材・研究基盤の確保という部分でA+を頂いており、そういった部分が高く評価されています。また準備組織の母体が無い法人でありながら短時間で、実際の期間は7年で、学園を立ち上げた実績があります。A+を頂いた主要業務の中の特徴としては、極めて質の高い国際ワークショップを開催し、グローバルネットワークを構築したというものであります。これは50回近く、年平均で8回程度の開催を行い、ネットワークの構築をしてきた。また外国人の参加割合が5割以上ということで、国際レベルの会合との称賛を受けております。講義内容につきましても、参加者の満足度について高い評価を受けており、入学生の4分の1、主任研究者の15%以上がこのワークショップの参加者である。2つ目が、極めて優秀な研究者を世界から採用していることです。外国人の主任研究者が6割強も占めている状況であり、これは中間目標の最低値を10%あまり上回っています。またノーベル賞受賞者による選考、なおかつ経緯ある賞の受賞歴、総合超一流学術誌等への論文掲載歴が豊富ということで世界最高水準の研究者が集結しています。また23年度の主任研究者の採用について採用数19名に対して500名以上の応募者あったということで、非常に優秀な研究者が世界中から集まっている状況であります。2枚目になりますが、こういった中でO I S Tは国内外において高い期待を受けております。例えば、日本だけでなく、英国の『Nature』、『Economist』等に大きく取り上げられています。実際に学生の応募、入学状況も当初予定の20名の約10倍の志願が集まり、18の国・地域から34名が選抜されている状況です。特徴的なものは6割が修士号を持っている方で、意欲的な学生が集まっている状況であります。こちらがいわゆる顕著な実績ということでございます。

次に、2ページにあります指摘された事案ですが、1から3までは減算要因として考慮する必要があるとしながらも、全体的には法人の特殊な性格に起因する側面があります。また悪意に基づくものではありません。何よりも再発防止にきっちり取り組んでいるという点を考慮する必要があります。なおかつ顕著な業務実績が上がっていることを踏まえ、業績勘案率は1.0とされました。それぞれの事案の特徴ですけれども、1つ目の施設整備費に関する予算超過について、これは減算要因でございますけれども、いわゆる法令違反に該当するような事実や意図的な不手際等は存在せず、再発防止策や業務運営体制の抜本的な強化はきちんと取り組んでいる。2つ目の、国会審議において管理運営状況について指摘された案件ですが、これについても組織として行ったものではなく、再発防止策もきっちりとられている。3つ目が、これも減算要因となっておりますけれども、契約に関する情報公開に関する法令違反ですが、これ自体も工事の発注自体に問題があったわけではなく、情報開示等において不備があったという瑕疵にとどまるものです。以上の3つが減算要因として指摘されたものです。4番目、5番目は減算要因には該当していないものですが、4は理事の旅費に関する報道があったことですが、これについては、業務と関連のない旅費の支出は認められず、また事務処理上の問題であり、法令違反や法人への損害が

生じているわけではない。なおかつ適切な再発防止策が取られた。最後の会計検査院からの指摘につきましても、事務処理上のミスが発端であり、何よりも適切な事務処理体制が構築されております。指摘された事案につきましては、このような説明を総務省にしたところでございます。

これを受けました先月末の総務省のWGでの実際の議論としましては、資料3にございますように、OISTのこのような顕著な業務実績につきまして、さらにわかりやすく説明できないか、ということでございます。

具体的には、指標やデータの意義の解説ということで、資料の2に付けておりますOISTの主任研究者の経歴、業績データ、受賞歴、論文掲載歴等を整理したものがございます。受賞した賞がどれだけ重要なものなのか、論文が掲載された学術誌がどれだけ重要なものなのか、一流学術誌への掲載割合の観点からOISTの優位性がいえるかどうか、また必要に応じ各研究者の方が在籍した大学の水準等により、さらにわかりやすい説明ができないかという指摘ありました。WGの結論としましては4月に引き続き結論を出さない状態で保留となったところです。こちらが4月から6月にかけての経過となります。

○平澤分科会長 ありがとうございます。この間に内閣府において資料を作られて、説明していただいたようですが、まだ完全にご理解いただいている状態でないので、改めてどのような説明をすればよろしいかということです。何よりも私自身は業績勘案率の1.0をぜひ実現したいと強く思っております、0.9となれば今沖縄に在籍している学園の人たちの氣勢を削ぐことにならないかなど。何としてでも1.0に漕ぎつきたいと思っているのですが。ただそれほど気にしなくていいんじゃないかと議論があるかもしれないので。そのあたりを先生方にご感想いただいて。まずはご質問等がありましたら伺いたいと思いますがいかがでしょうか。

○遠藤分科会長代理 資料3の主な論点を見ますと、資料2で説明をした前例のない困難な任務を短期間で完遂したことについて何ら触れていませんよね。これはどういう受け止められ方をしたのですか。

○岩井事業振興室長 前回の総務省WGでは、WGの先生が科学技術の専門家でないということで、なかなか研究者がどれだけ素晴らしいものかということが掴みきれなかったということで、実際に話に上がっているのが資料3に挙げられているものです。

○遠藤分科会長代理 それは資料3に書かれていることで説明しなければいけないことだと思うが、資料2で提出したことは大きく二つに分かれており、一つは資料3につながることであるが、いかに立派な体制を築いて将来に対する期待が非常に高まっていることを客観的にもう少し説明してくれということだと思う。ただその前に、全く準備もないという普通の独立行政法人が経験しない状態で、いくつかの技術的な至らない点があったが、結果としてみると立派なスタートを切ることができたということである。ところが資料3をみると、本当に立派なスタートを切ったことについてのいくつかの疑問である。では前例のない困難な任務を短期間で完遂したところをちゃんと認めてもらったのですか。

○岩井事業振興室長 これまで前例のない困難な任務を短期間でやったことについては一定の理解を得ており、4月のWGに比べると6月にWGでは委員の先生方の理解は深まったようです。ただ、残された論点としては、資料3にお付けしたことが残っていると。いわゆるご専門と違うところのお話ですのでその辺をわかりやすくどうやって伝えていくかということです。

○遠藤分科会長代理 前例のない困難な任務を短期間で遂行したことについて認められれば、あと立派な体制ができあがったことを皆さんに納得いただければよろしいということになりますね。

○岩井事業振興室長 これまで説明をしていますので、難しいものだということは理解していただいております。あとは資料3の部分をブラッシュアップすればご理解いただけると思います。

○遠藤分科会長代理 それでは表をもう少し見やすくする必要がありますね。

○岩井事業振興室長 もう少しわかりやすく、どなたが見てもレベルが高いことがわかるものにしようと思います。

○竹澤局長 遠藤先生のご指摘はよくわかります。私も今日の資料を吟味する際、資料3がある特定部分フォーカスされすぎて、見なければいけない部分を十分見ないことにならないか懸念していました。ただ総務省のWGの理解は他の部分については、かなりの程度理解がされているということで、フォーカスした資料になっています

○遠藤分科会長代理 資料2の表の部分について、『Nature』とか『Science』とか大変な業績がざあっと並んでいます。あまりにあるので価値が下がっているように見える気がします。仮に数人しかいなければ、もっと一つ一つ丹念に説明したのではないか。たとえば『Nature』ならどんなネイチャー（性質）なのかを説明すれば納得できると思います。

○伊集院委員 私自身も保留になった段階で説明資料をしっかりと拝見いたしました。データを集めて丁寧にご説明された成果だと思っております。今お話を伺うともう少し丁寧に、素晴らしい科学技術の専門家の集団で、これだけの大学院大学がスタートしているということをもう少し丁寧になさるといいと思います。いわゆる準備母体のない中で、これだけのものを、それも短期間で作りあげてきたことは、いろいろと比較しましても相当な実績がある期待されている大学院大学がスタートしようとしていることは、事実でございますので、そのあたりも含めて、とにかく理解されるようアピールしていくことが重要だと思います。流れの中で瑕疵はありましたけれど、結果としてこれだけのものができたことは何度も何度も強調なされた方がいいと思います。

○遠藤分科会長代理 やはり資料3が書いてあるように、『Nature』とはこういうものであり、『米科学アカデミー紀要』はこういう位置づけのものなんだということをしっかり説明して、例えば『Nature』にとりあげられることはこういう評価を受けることになるんだというようなことが求められていると思う。私が思うのは、WGの先生方が、

そういう勘案率を認めた時に、他の人にしっかり説明できるためにも具体的な中身が必要なのだと思う。この表は、わかっている人にはわかるというものだと思う。

あと 45 歳以下の方が 45 人中 21 人入っている。どういうことかという、これからまだまだ頑張ろうという研究者が半数近く参加しようとしていること。これは重要なポイントで、その辺の説明が足りていないといわれただけと考えている。私個人は 1.0 より上じゃないかと思っているが、1.0 はぜひ死守していただきたい。

○竹澤局長 事務的に、こういう作業をしていったらいいかと考えているアウトラインを申します。「受賞した賞の重要度」という点でいえば、例えば、何々賞という話になったとき、ノーベル賞だとこれはすごいとわかるわけですが、フィールズ賞、これは数学のノーベル賞ですねとか、聞いたことのないような分野の賞が、素人の一般の感覚で位置づけがわかるように説明をしなくちゃいけないかと思っております。それから、「掲載された学術誌の重要度」ということについては、例えば、この雑誌に掲載された後にノーベル賞をもらった方が多くいるだとか、それから、この雑誌はこういう専門家の構成によって委員会ができていて、載るだけでどれだけ難関かという説明。3つ目の「一流学術誌への掲載割合の観点から優位性がいえるか」という点。日本の中でも類似の大学をひいて、優位性を数字で言っていけるか工夫をする必要があると思います。それから、「各研究者が在籍した大学の水準」、コンパクトなんですけど、一番下にタイムズ社、上海交通大学又はライデン大学による世界大学ランキングで 50 位以内の大学だという一定の根拠があるわけなので、これは単に我々が優秀だと言っているわけではなく、国際的な物差しに当てはめたものということをもっと打ち出した説明を強めていきたいと思っています。

○平澤分科会長 O I S T の形成過程を考えてみると、大きくは 2 つに分かれているわけです。もう少し小さく分けると 3 つになる。いずれにしても、発足するまでの間に地歩を固めてきた人達がいるわけですね。その人達の努力の上で、20 名近くの方が入ってきたと。この表で番号が打ってあるんですけど、これはアルファベット順になっているような気がします。着任順にするとと言うと語弊があるような気もするのですが、前半と後半に分けてみると、どうなったかなという気がします。それで後半になって大募集して、500 人ぐらいが応募して、19 名の方がいらっしまった。そういう 500 人が応募するまでの素地をつくったのが、主に理事長なり理事の業績なわけです。第 1 期の方がいかに優れていたか、そしてネットワークが形成された結果として、第 2 期にもこんな優秀な方が入ったということになるのではないのでしょうか。もう 1 つは、ネガティブな側面をどういう風にして氷解させたらいいのかと思っているわけです。私の経験で言いますと、総務省の評価委員との懇談というものが以前に何回か開かれまして、その時に、内閣府の方の担当の評価委員の方達と議論したときには、本当にひどいと思ったわけです。新聞沙汰になったようなことしか取り上げずに、こんなところにお金をつぎこんでどうするんだという認識でいた人達なんです。それに対して私が、「とんでもない、いいものができつつありますよ。」ということをご説明したのですが、なかなか、「そうですか。」ということにはならなかったで

すね。その時の委員というのはあらかじめ代わっておられるのではないかなと思いますが、そういう先入観を持った方達を氷解させる難しさがあるような気がしています。

○竹澤局長 そういった感じが未だに一定程度はあると思います。その中で、総務省のWGの方から平たく、「この先生の偉さなり、凄さを教えてよ。」と問いかけになっているということはまだ光明があるというか、材料としていいものはあるんだけど、まだ私どもの訴え方、わかりやすい説明が足りないと思うので、そこを一生懸命やっていくということ。アンテナを高くして、相手の問題の関心によっては、平澤分科会長と相談をしながら、資料3にフォーカスを当てていくんだけど、もう少し念入りに幅広く準備していきたいと思っております。

○遠藤分科会長代理 先ほど平澤先生がおっしゃった最初の頃のメンバーが色々な活動をされた。ワークショップなり学術論文を発表された。そういうことを見て、参加してみて、その方達の影響があって、新しいPIなり学生がきたということは、そこで世間の評価がなされたということです。ある基礎固めの時期の活動を見た人達が応募しているということは間違いのないわけです。ということは、その間に起こっていたネガティブな点を見てきた人もいるだろう。にもかかわらず、これだけ優秀な研究者や学生が応募してくれてきたということは、大変大きな援軍だと思います。

○平澤分科会長 理事長や理事の業績というならば、最初の国際ワークショップの間につくられたネットワークが基になっている。我々も評価委員をやるときに、どうやって世界第一級のものをどういうメカニズムで作っていくのか、最初は全然わからなかったわけです。2年目くらいには、国際ワークショップを何回開いたかくらいのデータしかなかったが、追加でアンケートの結果を見せてもらって、それでようやく、なるほどいいことをやっているのだなというのが、わかってきたというところです。これだけたくさんやっている国際ワークショップの結果を全部見せるわけにはいかないけれども、そういうところからも理解してもらえないかなというところです。私自身も、メンバーの構成が優秀な方だというのは理解していましたが、これほどまでに優秀だとは、思っていなかったのですよ。主要な業績のリストを見せてもらって、こんな集団というのは日本にありはしないと私は思いました。だから、それからですね。これはどうしたって1.0にしないとイケないと思ったのは、私自身がOISTの研究者を評価する時の心証を突き詰めていくときに役に立ったデータがいいんだろうなと思います。私は理科系だから、データを見ると、だいたいこうかなっていうのを考えられるわけなのですが、文科系の方は必ずしもそうでもないんですね。どうやって説得したものかというところは感じます。

○遠藤分科会長代理 要するに資料3のところで、わかりやすく説明してよということが一番のポイントになってくる。わかりやすさとはどういうことなのかというと、WGの委員の先生が納得するというだけではなくて、先生がこのことに関心、興味、関心をお持ちの方に聞かれたときに、使えるような形にまで噛み砕いて広げてあるのが重要なのではないかと。そうすると、『Nature』とはこういうものだ、『Science』とは

こういうものだというのを初心者に教えるように説明をつけておく必要がある。そういう意味では、この表はいかにも不親切ですな。最終的には、世界最先端の大学院大学をめざしているということに対して、どうなのかということを知りやすく説明できるようにしてくれというのが残った氷を解く鍵であろうと。さきほど平澤先生がおっしゃったみたいに、ノーベル賞をもらった人は『Nature』の常連だとか『Science』の常連だということがわかるだけでも、ずいぶん違いますよね。

○平澤分科会長 『Nature』、『Science』というのはマガジンであるにもかかわらず、精選された論文を掲載している。社会的に多くの人が興味を持つような新しい研究をやったという証なんです。通常は、雑誌には投稿すれば、査読に回して、査読者がポイントや点数をつけたりする。だけど、ネイチャーとサイエンスは最初の段階では査読には回さないのです。投稿されて、まずは様々な意味でのインパクトが大きいかどうかを評価するというプロセスになり、そして査読に回される。それから、『プロナス（米国アカデミー紀要）』はどうかというと、オリジナリティから言うと、2番手になるくらいの内容がある。それは、研究者がいくつか論文をだして、その論文をまとめてみると、大きなインパクトがあるということアメリカのアカデミーの会員が察知して、投稿してくださいということになる。ですから、『プロナス』にいきなり投稿するということはいけません。アカデミーの会員に推薦をされてようやく投稿できるようになる。私はアメリカにいたときに、その薦めている現場を知っている。また、ノーベル賞を目指している若手のアクティブな人なんかは『プロナス』に推薦してくれと一生懸命頼むわけですよ。だけど、アカデミー会員のほうは推薦しないわけです。だから、そういう現場を見ていて、『プロナス』というのは尋常のものではないなという印象を持っているわけです。ですから、この3つの雑誌は特に意味があるというのはそのような理由からです。

もう少し言うと、アメリカのナショナル・サイエンス・ファウンデーション（NSF）という基礎的なリサーチに資金を提供している省レベルの機関があるんですけど、区別で言うと、リサーチとデベロップメント、いわゆる研究と開発に分かれる。そしてリサーチをベーシックとアプライドに分ける。それで、一般に研究を募集するのですが、評価の基準に相当するものがあります。これは分野によらず共通に定められておまして、2つの基準があります。1つはインテリクチュアル、要するに知的さ、もう1つはブローダーインパクト。ブローダーインパクトというのは、単にサイエンスだけではない、サイエンスでも自分の領域だけではない、より広いインパクトがあるというのが2番目の基準なんですね。なぜ、ブローダーインパクトという第2の基準をつくったかと言いますと、議会在アカデミックのほうだけに流れていかないように監視をしているからです。今のようなシステムに変わったのは97年からなんですけれども、それ以前の81年までは3つの基準に分けていました。その3つのうち1つはソーシャルインパクトという言葉を使っていました。ところが、調べてみるとソーシャルインパクトというのはほとんど使われていなかった。基礎研究中心だから、そんなのわかりっこないよということで評価基準に入ってこ

なかった。それで議会がずっと改善を要求していた。そのきっかけとなったのが、政府業績成果法（G P R A : Government Performance and Results Act）で、これはクリントン大統領のときですけれども、共和党の議会に変わりました。共和党が民衆党の政府に枠をはめるために、そういう法律を作りました。そういう法律で、3年から5年のストラテジックプランというものを作って、それに基づいて予算要求をし、毎年パフォーマンスを報告していくというものになりました。それで、92年にそういう法律を作ったんだけど、実施したのは97年か98年です。その間にすごくもめるわけですよ。NSFはすごく抵抗する。基礎研究やっているわけだから、そのような評価はできないと言うんだけど、最終的には、ブローダーインパクトの中身を含めて評価しないとイケないということになった。G P R Aは全省庁に適応しているので、そのG P R AにふさわしいようなNSFの設置法に決めてあるミッションからはじまって、どういった戦略を持つかというものがあるのですが、その中には、どれだけ社会に貢献するかというものが入っている。ということで、実は81年以降ずっと連邦政府の中でできなかったことを、G P R Aを導入して、評価基準の見直しということをやらざるをえなくなった。それで、どういう研究が優れているかということ、研究の中身が1つ、もう1つは、より広いインパクトを持っているということが重要だということです。そういうことを考えると、『N a t u r e』や『S c i e n c e』がトップだということがわかる。単なるアカデミックな雑誌だけであれば、第2の基準はないわけです。

○竹澤局長 私は文科系の典型ですので、『N a t u r e』や『S c i e n c e』は、とにかく学術的観念のみだと思っていただけですが、そうではないと。そうであれば、これから資料を作るときに、総務省に対して訴えていく価値があるわけですね。

○平澤分科会長 記者会見をして一般紙に載せてもらうときのほとんどが、『N a t u r e』ですとか『S c i e n c e』に掲載されましたというものです。その他の学術的な一流誌に載ったというだけでは、一般誌で記者会見をして取り扱うということはずまい。最近でO I S Tの例で言うと佐藤先生のサンゴの件についても記者会見して発表したわけですが、例えば、O I S Tにたずねて、O I S Tの先生方が記者会見した発表した際の資料をもらうということでもいいかもしれません。いい研究をしましたよ、というより、社会性がありますよということがバックにあるから一般紙も採用してくれるわけです。

○藤本審議官 法人業績として、マイナス要因をさらに上回るような顕著なプラス要因を示してほしいというところが議論の出発点になっております。その際に、困難な目標とはいえ、それを中期目標でかかげたからには、自分達で選んだ道だということで、それを上回る顕著な実績を示してくれないかという厳しめのコメントだったわけです。そこで、これまで先生方と相談しながら資料を作ったりしてきましたが、その時のひとつのアプローチが、これまでA+という評価をいただいているものについての説明です。全般的に内閣府の独法評価委員会では、他の分野を見ても厳しめに評価をいただいております。なかなかA+というものはいただけないわけですが、O I S Tの場合には、これまでもいく

つかありまして、その中でもOISTが学校法人に移行するにあたって重要な点であります。主任研究者をいかに確保してきたかという点、そして先ほど平澤先生がおっしゃった国際ワークショップの成果についてA+をいただいているところです。それをいかにわかりやすく伝えていくのかということで、これまでも取組をしてきましたし、引き続き取組んでいくつもりです。資料2の2(2)のところで、優秀な研究者をいかに採用できたのかというようなこともやっていくつもりですけど、加えて、選考の手順についての説明も重要なのではないかと。平成22年度、平成23年度の評価時のコメントをもう一度見させていただきまして、その分野の外部評価をきちんと経ているということを指摘いただいております。ノーベル賞受賞者や世界の一流の学者の目を経て選考しているということを丁寧に説明していくことも必要ではないかというのが第1点です。

2点目に、先ほど遠藤先生からもお話がありましたけれども、A+をいただいた時のコメントを見ますと、学際性だとか多様性とか年齢構成のバランスについてもコメントがありました。そのあたりについても、これまで説明が足りていなかったと思い、補強していく必要もあるのではないかと考えているところです。これらの点についても先生方のコメントをいただけないでしょうか。

○平澤分科会長 まさにおっしゃるとおりだと思います。1つのきっかけは、ネットワークをつくってきたことですが、もう1つは、どのようにしてバランスをとって選考していくかは、なかなか難しいところです。私自身、非常に広い学問領域を担当する学科で、それを運営する苦勞を思い浮かべてみた。そして非常な工夫がなされているのを見て、そういうところからA+という評価にいたった。それから、もう1つは、研究者が5年の期間制であり、継続が保障されないんですよ。つまり、採用した際には優秀だと認めて採用しても、5年間でちゃんとした仕事がでなければ切るということです。こういったことはなかなかできないんです。評価の仕方も、内部ではなく、外部の評価委員会が手動して評価をする。こういう仕組みも、質を担保するいいメカニズムである。それをもう少し違った形で文書にしてもいいでしょう。

○遠藤分科会長代理 資料3に「主な論点」と書いてあって、あとは下の項目のところに議論が集中してしまうわけですよ。ですけれども、審議官や平澤先生がおっしゃっていたように、仕事のやり方まで見る必要があるのかと。ここに書いてあることだけ見ると、この表の説明をもうちょっとよくしろ、とだけ受け止めてしまう。ノーベル賞受賞者を含めた外部評価委員会で研究者の質を厳しく問うようなことをやっているということも、顕著な業績として書くべきなのか。あるいは、この項目だけをもっとわかりやすく説明してくれば認めるよ、ということなのか。それによって書きぶりが変わってくる。

○岩井事業振興室長 総務省の委員の専門外の分野なので、それをもう少し噛み砕いて説明してほしいということでした。

○平澤分科会長 4月の段階では、業績を数量的に表現するようにとか、わかりやすい形でという話だったので、資料3のようになったのかと思いますが、もう少し補強してもい

い気がします。

○遠藤分科会長代理 世界最高のメンバーを集めたということを証明するということにとどまらず、その後も非常に質の高い研究を維持するメカニズムを備えているということをつけ加えると、よりわかりやすいのかもしれませんが。

○竹澤局長 今、議論がとても大事なところにきていると思います。いわば、資料3のところに集中するだけで大丈夫なのかということについて、WGの先生の意図が明瞭でないならば、ここは作業として我々は頑張らなくてはいけないわけですけど、遠藤先生のおっしゃったとおり、事務的に幅広にやって補強したほうがいいという考え方に近づいてきました。実務をやっている感覚としてどう感じますか。

○岩井事業振興室長 今日ご議論いただいたことで、新たに活用できるものがあれば使っていきたくて考えています。

○平澤分科会長 要するに、A+の中身をもう少し説明するということです。なぜA+をつけたのか、それは、いい人を集めたということが1つだし、いいやり方をとっているということが1つです。いいやり方ということについては具体的に説明してこなかったわけですけど、それは、顕著な実績を説明するという中で並べてもおかしくないという気がします。

○遠藤分科会長代理 資料3の「OISTの顕著な業務実績について、科学技術分野の専門家ではない者に、さらに詳しく説明できないか。」というのは、WGのご意見をちゃんと記述していると考えていいのでしょうか。要するに、顕著な業務実績をちゃんと述べなさいと言われたということであれば、下の項目だけでは足りないのではないかと。そうではなく、顕著な業務実績を説明するにあたって下の項目だけをちゃんと行ってあげればいいということでは、意味が全然違うわけですよ。だから、「顕著な業務実績を述べなさい」と言うことであれば、下の項目だけでは足りないと思うので、平澤先生が言われたことは必ず重要なポイントになると思う。

○平澤分科会長 資料3の二重丸のところは、総務省の事務方がWGの先生方の反応を見て、こういうことをもっとわかりやすく付け加えたらいいのではないかと示したわけですね。

○遠藤分科会長代理 そういうことであれば、下で示されている項目だけだとフォーカスされすぎのような気がする。

○平澤分科会長 ここで話を離れるのですが、文科系の人というのは、どういうことを説明したら納得するのでしょうか。理科系の人には、単純にデータを示せばすぐわかってもらえるのですが。

○泉専門官 データがどれだけすごいものかということを知るだけの基礎的な素養が、どうしても文科系にはないところがあります。『Nature』や『Science』が有名な雑誌だということはわかるわけですが、今日お話しがあった、査読の手続きですとか、社会的インパクトをちゃんと見ているといった、なぜすごいのかをきちんと説明する提出

したデータの意義や中身を噛み砕いて説明していくことになるのかと思っています。選考基準についても、ノーベル賞受賞者による選考ということで簡単に触れてはいますが、どれだけ厳しい基準で選考しているかということをもう少し丁寧に説明していく、これまで提出した情報・データの深堀をしていくというのが、次回の総務省WGまでに我々ができることではないかと思っています。

○竹澤局長 今日ここまで、ご議論をいただいて、遠藤先生のご指摘は大事だと思います。我々に与えられている課題が何であるかが今一つクリアでない中、フォーカスしすぎているということであれば、リスクが大きいのではないかということですね。我々への課題が書き物としてきているわけではないので、我々が特定の部分にフォーカスしすぎるリスクを下げるのが賢明ではないかと思うわけです。先生方のご意見を聞き、実務を見ている中で、今日のお話を最大限に生かすとするれば、幅広いコンテキストの中で説明していくことになるかと思っています。

○遠藤分科会長 アウトプットは2つある。1つは中期目標に相応しい体制を整えることができたかということ。それからもう1つは、内部的に質をどんどん高めていくメカニズムを持っているかということ。そこを説明すると同時に、それがないと、いかに優秀な人をスタートアップのときに集めたとしても、だめだということを伝えないと意味がないと思います。

○伊集院委員 資料3の内容だけですと、優れた研究者という中身の素晴らしさだけになってしまいますので、それだけではなく、色んな瑕疵ということで減算要因となされていることについて説明した上で、そうしたことが最初であったとしても、結果としてこのような内容のある大学院大学としてスタートし、今後もそれが維持できるような組織づくりができている、という流れでお話をしていけばいいのではないかと思っています。

○平澤分科会長 これは実現するかどうかわからないけれども、もしこういう資料を作って説明しても、なおわからないと委員が言うならば、私が直接説明にあがりたいという気持ちでおります。最初の方でも申し上げました通り、とにかく新聞種みたいなものだけで持っている先入観が気になっているので、全く違うものができていますよということをおわかってもらいたい。

○平澤分科会長 それでは、本日はこういうところでよろしいでしょうか。これが、最後の分科会になることを祈っております。